

音楽の散歩道 その10の2

— ベートーヴェンの「第9」200年記念 — ベートーヴェン, チェルニー, リスト

| キラメキテラスヘルスケアホスピタル | 栗 博志・高田 昌実・田島 紘己・上村 章
 | 加治木温泉病院 | 夏越 祥次 | 東区・荒田支部 | 栗 隆志
 | 大海クリニック・大海宮崎クリニック | 大西 浩之・海江田 寛・牧野 智礼

はじめに

ベートーヴェンの交響曲は、その後半生に作曲された。

即ち、第1番から第8番までが1799-1812年の14年間に作曲され、更にその12年後の1824年に、彼自身の最後を飾るに相応しい大作となった、第9が生まれた。

全9曲のうち、5曲が作曲年、3曲がほぼ1年以内、第8番のみが約2年後に、ハプスブルグ家のお膝元、ベートーヴェンの居住地のウィーンの劇場で公開演奏された。

楽譜の準備、演奏会場の確保、演奏練習期間などを考慮すれば、公開演奏までの期間が長すぎる事は決してなく、ウィーンで彼の交響曲が演奏されずに放置される事は全くなかった。

その後の時代の大指揮者達は、他のどんな作品より優先的に彼の作品を演奏し、録音してきた。

図14上は、1842年創立のNYフィルハーモニー協会、ナショナル交響楽団による、1924年までの全11曲の全録音の記録盤で、指揮者はメンゲルベルグである。

この11曲の中で、最も早期に録音されたのが、1922年に録音された、ベートーヴェンの「コリオラン序曲」と「交響曲第5番、第1楽章」である。

図14中は、厳しすぎる暴君トスカニーニの1952年の「第9番」他の練習風景を録音した記録盤である。

図14下は、ベルリン・フィルを指揮したフルトヴェングラーによる、1937年の「第5番」。



図14 ベートーヴェンの録音
 上:「交響曲第5番」メンゲルベルグ,1922
 中:「第9番」の練習風景,トスカニーニ,1952
 下:「第5番」フルトヴェングラー,1937

これに対して、ベートーヴェンのリストによる編曲（クラシック音楽では、編曲の事を作品により、トランスクリプション、アレンジメント、パラフレーズと使い分ける。バリエーションやファンタジーも変曲の一形態である。この場合はトランスクリプションである）は、第5, 6, 7番が1837年(リスト26歳)に完成した。

これらの2手・独奏P編曲版に対し、第9番の2台のP編曲版が51年に完成した。

以下、時代は1800年代であるので、年代を下2桁で記載した時は、1800年代を示す。

そして最終的に、全9曲の独奏P編曲版は1863-64年に完成し、65年に出版され、ハンス・フォン・ビューローに献呈された。

然し、ベートーヴェン交響曲のP編曲に先立ちリストは、ベルリオーズの「幻想交響曲」を1833年(リスト22歳)、ヴィオラ・パート付の交響曲「イタリアのハロルド」を37年にピアノ編曲している。

今回は、ベートーヴェンの交響曲のリストによるP編曲版の演奏史を述べるのではなく、1800年代初期のピアノ教師と才能ある弟子の日常をチェルニーとリストを例にとり、簡単に紹介する(このような道以外に音楽学校に行く道もある)。

更にリストとベートーヴェンの歴史的出会いについても述べる。これが、リストがベートーヴェンの交響曲のP編曲版を書く遠因となったと思われるからである。

また、当時のアマチュア音楽家の演奏レベルは高く、その為、家庭で楽しめるよう、多くの大曲や有名曲の編曲版が作られた事にも言及する。

なお、ここで紹介するLP, CDは、ほぼ20世紀のものに限定し、LPを優先する。パイオニア的価値が高いからである。更に、21世紀になると、誰でも簡単にCDが作れるよ

うになったからである。

さて、古典派からロマン派の音楽家の人脈を理解するには、音楽家の生年、没年、満年齢を知る事が重要であるので、以下に示す。

モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトが、オーストリアのウィーンで活躍した古典派の代表的音楽家で、フンメル、フィールド、カルクブレンナー、チェルニー、モシュレスが過渡期、そしてベルリオーズ以後がロマン派である。

1809-13年には、ロマン派を代表する音楽家が、次々と誕生した。

| | | |
|-----------|-----------|-----|
| ・モーツァルト | 1756-1791 | 35歳 |
| ・ベートーヴェン | 1770-1827 | 56歳 |
| ・フンメル | 1778-1837 | 58歳 |
| ・フィールド | 1782-1837 | 54歳 |
| ・カルクブレンナー | 1785-1849 | 63歳 |
| ・チェルニー | 1791-1857 | 66歳 |
| ・モシュレス | 1794-1870 | 75歳 |
| ・シューベルト | 1797-1828 | 31歳 |
| ・ベルリオーズ | 1803-1869 | 65歳 |
| ・メンデルスゾーン | 1809-1847 | 38歳 |
| ・ショパン | 1810-1849 | 39歳 |
| ・シューマン | 1810-1856 | 46歳 |
| ・リスト | 1811-1886 | 74歳 |
| ・タールベルグ | 1812-1871 | 59歳 |
| ・アルカン | 1813-1888 | 74歳 |
| ・ワーグナー | 1813-1883 | 70歳 |
| ・ブラームス | 1833-1897 | 63歳 |

Part 3 音楽教師チェルニーとリスト

1800年代初期の知名度の高いピアノの教師はどのような生活をしていたのだろうか。代表的なチェルニーについて述べる。

プラハのベネディクト派修道院で音楽教育を受けた父は、1786年にウィーンに転居し、

ピアノ教師を始めた。もちろん息子の教育も。

チェルニーは記憶力に優れていた。家庭ではチェコ語を話し、独、仏、伊語は、父のピアノの弟子から学び、10歳の時にはイタリア語を完璧に話す事ができたという。

また10歳の時には、初見演奏と共に、モーツァルトなど、当時のほぼ全てのクラヴィーア曲を、暗譜演奏できたといわれる。

チェルニーが何年間ベートーヴェンに習ったか知らないが、多忙なベートーヴェンは、レッスンをキャンセルする事が多く、ほとんど独学で勉強を続ける一方、1801-04年には、モーツァルトの妻の毎日曜日の「音楽の夕べ」に通い、多くの演奏家の演奏を体験した。

ここで彼が感銘を受けたのが、モーツァルトの弟子のフンメルの演奏であった。

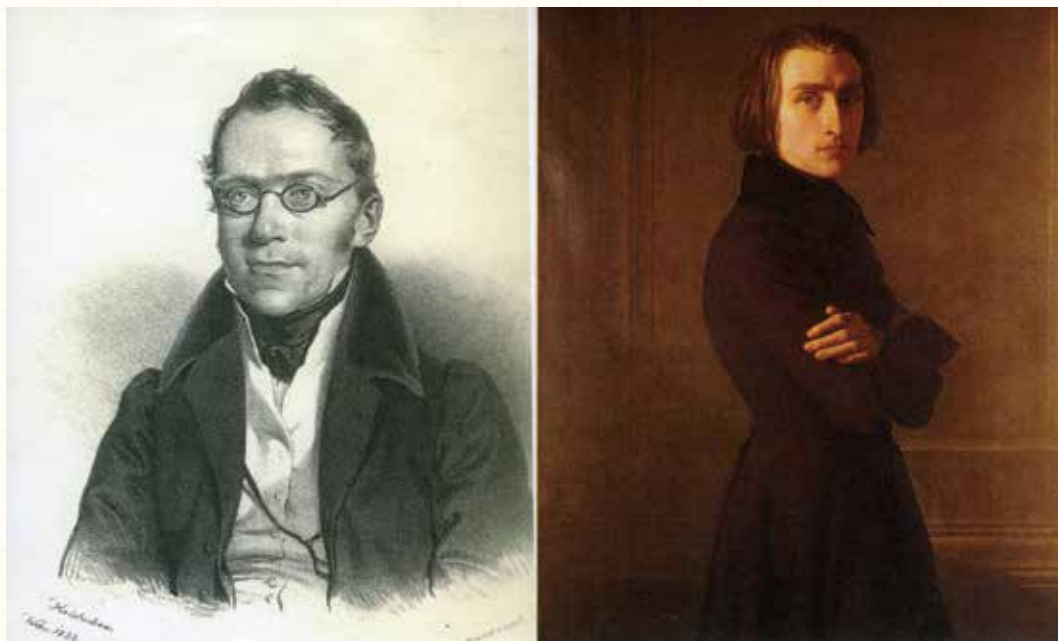


図15 左:リストのピアノの師チェルニー,1833 右:リスト,1839

チェルニーがウィーンで高名なピアノ教師になり、多くの上流貴族の子弟を生徒に持ち、高額なレッスン料を取り始めたのは、06年、わずか15歳の時である。

ピアノ教師になったのは、強い父の意志だった。戦時下のヨーロッパで老齢の父と演奏旅行をする事は無理であったし、チェルニー自身、演奏能力の限界を見極めていたのだ。

以後、彼は勤勉にピアノ教師を務め、特に16-36年の間は、朝8時-夜8時、毎日11-12時間、10-12人にピアノを教え続けたのである。

2024年、日本では「働き方改革」で労働時間が厳しく制限されるようになったが、200年前のウィーンでは、12歳以上の子供は、1日13時間まで働くことができた。年齢と労

働時間は別にして、労働の権利と労働時間の制限が確立していた事は、驚くべき事である。

ピアノ教師として稼ぐかわら、作曲にも精を出した。作品番号付だけでも861曲を数える。ピアノ練習曲は、わずか90曲で、その他は、交響曲、協奏曲、室内楽曲など、更に多くは、オペラなどのピアノや弦などへの編曲である。

例えば、ハイドンの12の交響曲、オラトリオ「天地創造」、モーツァルトの後期の6つの交響曲、「ドン・ジョバンニ」……などである。

ベートーヴェンの全交響曲も2台のピアノ用に編曲されている。

図16は、モーツァルトの「交響曲第40番」のチェルニーによる4手ピアノ（連弾）用の

編曲である。ただし、このCDではオルガンで演奏されている。1989年録音。

これらの多くは、ロンドンとライプチヒで1835-39年に出版された。そして43年までに734曲が出版されている。

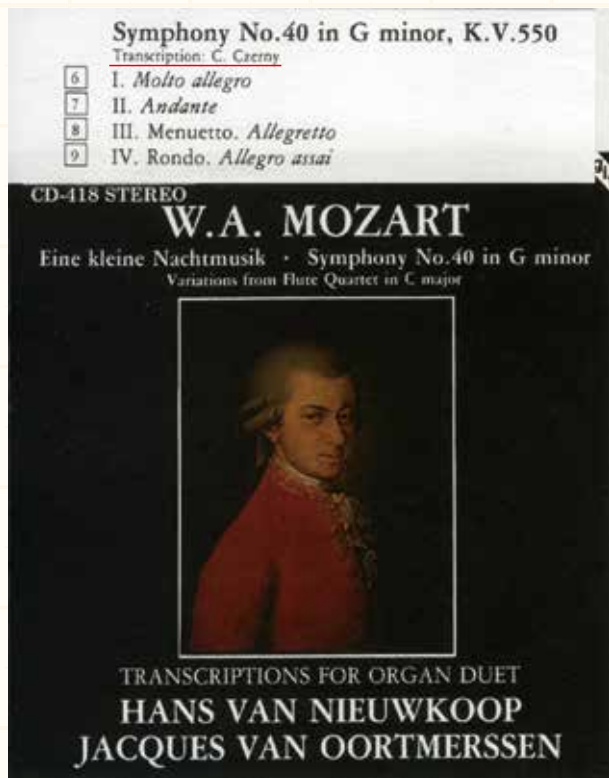


図16 モーツァルト「交響曲第40番」
チェルニーによる4手ピアノ版(本CDはオルガン演奏)

彼の最初に出版された4手のロンドは50グルデンで売れた。出版される毎に多額の報酬が入った。

アマチュア音楽家が多く、彼らの演奏能力は高かったため、家庭で演奏を楽しむための、楽譜の需要が極めて高かったのである。

時間をかけて大作を書くより、アマチュアでも弾ける、有名曲の編曲などを多作する方が、金銭的にはずっと有利だったのである。

このように勤勉に働き、両親を養った彼が死後に遺した遺産は、何と10万グルデン以上にのぼった。本誌10月号のベートーヴェンの遺産、7千グルデンに比べると、雲泥の差である事が分かる(本誌10月号参照)。

宮廷楽長などの定職に就かず、芸術家として生きていく事の難しさを思い知らされる。

一回もレッスンをキャンセルする事なく、

夜は作曲して遺した大金の大部分を、彼は遺言で慈善事業に寄贈した(一部は家政婦とその兄弟に)。見事と言う他ない。

図17上は、交響曲、1997年録音。

図17中は、「ベッリーニの(オペラ)、カプレーティとモンテッキのアリアによる、華麗なる変奏曲」や練習曲、1988年録音。

図17下は、4手(連弾)のための幻想曲や大ソナタ、1990年録音。

リストは、当時ハンガリーの一部だったドルヤーンに生まれた。ウィーンから、わずか80km位の所であった。



図17 チェルニー
上:交響曲
中:2,4,6手用の編曲他
下:4手用の幻想曲他

エルテルハージ侯爵家の宮廷楽団員（アマチュア）でもあった父アダムに音楽を学んだリストの驚くべき才能を知った貴族達から、年600グルデン、6年間の奨学金を得る事となった（「向こう6年間で600グルデン」と記載された本もあるが、私の計算では、これでは生活できない）。

オーストリア帝国（ハプスブルグ家）の首都ウィーンにリスト親子が転居したのは、1822年5月で、この地でリストは、チェルニーにピアノを、ウィーン宮廷楽長のサリエリに作曲等を学ぶ幸運に恵まれた。

サリエリは43のオペラの他、多くの曲を作曲し、多くの音楽家に作曲等を教えた。

図18は、サリエリのP協奏曲他である。1985年録音。

この時、リスト11歳、チェルニー31歳、サリエリ72歳であった。レッスンのため、リスト親子は、チェルニーの近くに転居。



図18 サリエリの協奏曲
ピアノ：バドラ・スコダ、1985

2人の師は、この驚異的才能を持つ少年に特別の関心と期待を寄せた。リストの勤勉さ、集中力、理解力、上達速度に驚嘆した2人の師は、極めて例外的な事に、無料でリストを教えたのである。

サリエリは同年8月25日付で、エステル

ハージ公に長文の手紙を書いている。

「私の自宅で、リスト少年がピアノで即興演奏するのを聴いた瞬間、私は驚嘆し、本当に夢を見ているのではないかと思い……父親におめでとう、と言いました。……私は喜んで、友情からリストに私の知識を伝授したい。……父親が週3回、11時に連れて来るが、その進歩は目覚ましく……暑い日は汗をたらし、顔を紅潮させてくる……天気の良い日に遠くから通うのは、健康に悪い……市内に住むべきで、毎日でも教えたい……」と、エステルハージ侯爵に、長文のリストへの経済援助の依頼の手紙まで書いている。

ピアノ教師として多忙なチェルニーは、その仕事を終えた夜間に、毎日、リストを教えた。リストは、多分、チェルニーの家で食事をとり、泊まり、朝方に帰宅したと思われる。

チェルニーに音楽教育をした父親と母親は、可愛くて、勤勉で、才能に恵まれたリストを非常に可愛がったという。

そして昼間は、サリエリのもとで学んだのである。

数ヶ月後、リストはバッハ、ベートーヴェンを含む、全ての作曲家の作品を演奏するに足る演奏技術（メカニック）や、音楽表現能力を身に付けると共に、暗譜、初見、即興演奏、移調など、演奏に必要な要件を全てマスターした。

12月には、リストは、2回の演奏会を行ったが、曲はフンメルのP協奏曲や、聴衆から与えられたテーマの即興曲であった。

また、この年に、当時の高名な音楽家50人の一人としてリストは選ばれ、「ディアベリ変奏曲」の第24変奏を作曲した。チェルニーもその一人で、彼が推薦したのだろう。

Part 4 リストとベートーヴェンの 奇跡的な歴史的出会い

リストのみに可能で、他の多くのロマン派の音楽家達の誰一人として、できなかった事

がたった一つだけある。

それは、リストがベートーヴェンと出会った事である。

それが可能だったのは、幾つかの理由が偶然重なった事による。

ベートーヴェンの晩年に、リストがウィーンに居た事、リストに音楽的才能があり、たまたまチェルニーとサリエリの弟子だった事、更にチェルニーは、ベートーヴェンの有能なピアノの弟子であり、サリエリは作曲の師であった、この3点である。

本誌10月号で既に述べたように、難聴の進行と、多分、死を予感し、作曲できなくなる事を覚悟したベートーヴェンは、1822-24年にかけて、持てる全ての能力を注ぎ込んで、生涯の締め括りとなる大作・傑作を、次々と生み出していった。

聴覚は極度に悪化し、経済的にも早く作品を完成させ、出版せざるを得ない状況にあった。彼は、一分一秒たりとも無駄にできなかったのである。ベートーヴェンには、子供の相手をする余裕など全く無かった。

さてリストを含め、生粋のロマン派の音楽家達全員は、1810年前後に誕生している。

1827年に死亡したベートーヴェンに出会うチャンスなど、時間的・空間的に考慮しても全く無かったのである。

リストに関する沢山の文献を見ても、この奇跡的な歴史的出会いについて、詳細にその意義に関して述べているものは皆無であり、簡潔にまとめているだけである。

ここでは、前記の前提を踏まえた上で、私なりの考えを述べ、この会見が、リストによるベートーヴェンの全交響曲のP編曲の、重要な遠因の一つになった事に言及する。

チェルニーとサリエリの2人の薫陶を受け、それを見事に開花させたリストは、1823年4月13日に、ウィーンで本格的な演奏会を開く事になった。

奇跡の出会いは、演奏会場ではなく、その前日、4月12日に起った。

この日、リスト親子は、ベートーヴェンの自宅での面会を、許されたのである。

先に述べたベートーヴェンの諸事情を考慮すれば、面会など許されるべくもないが、彼の弟子のチェルニーの口添えもあり、秘書役のシンドラーの了承を得て、特別に面会の許可を得たのだろう。

親子の面会理由は、演奏会へのベートーヴェンの出席依頼だったと思われるが、難聴のベートーヴェンに、客寄せのような依頼を受ける時間的余裕は無く、即座に断られたに違いない。

次善の策として、演奏会での即興演奏のためのテーマをもらい、それを封筒に入れ、封をして、当日、会場で開いて演奏するという提案をしたようであるが、真の芸術家で、大作を作曲中のベートーヴェンが、見世物芸のような依頼を受けるはずもない事は、火を見るよりも明らかな事であった。

この日、ベートーヴェンの前で、ハ長調のP協奏曲(第1番)の第1楽章他を弾いたと、後にリストは語っている。

この時、西欧人の習慣として、弟子の紹介で自分を訪ねてきて、自分の曲を演奏し、一刻の安らぎを与えてくれた、有能な少年に、ベートーヴェンがハグしたり、額にキスしたりする事は、むしろ当たり前の事であろう。何もしない方がおかしいのである。

リスト親子が演奏会の前日に、ベートーヴェンを訪れた事は、筆談帳に記されている。

4月13日の演奏会では、フンメルの「P協奏曲」と、モシュレスの「ピアノとオーケストラのための大変奏曲」、聴衆からのテーマによる即興曲、他が演奏された。

この2人が当時、有名で人気があったからである。

だが実際の演奏会の演目の選曲に関してチェルニーは、ベートーヴェンの出席の可能

性も考慮し、かなり検討したに違いない。

単純（純粹）明快なモーツァルトは、もはやリストの弾く曲ではないし、重厚長大なベートーヴェンも、もはや時代の潮流に、そぐわない。

モシュレスは、ベートーヴェンの信奉者（死の直前のベートーヴェンが、金銭で最後に頼ったのが、ロンドンのモシュレスで、「莊嚴ミサ」のロンドン初演も行った）で、モシュレスが、ウィーン在住の折、ベートーヴェンが、全幅の信頼を置いていた人物だった。

フンメルは、若き日のベートーヴェンの最大のライバルであったが、歳と共に問題はなくなった。

何よりチェルニーは、フンメルの演奏スタイルが好きだった。ベートーヴェンの豪快な音量を楽しむピアノの時代ではなく、チェンバロ、フォルテピアノ（合わせてクラヴィア）の時代のモーツァルトに、流麗かつ洗練された音色を楽しむ奏法を、たたき込まれたフンメルのスタイルが好みだったのである。

死の10日前にワイマールから見舞いに訪れたフンメルと兄弟子（後述）ベートーヴェンは、昔を懐しんだと言われる。

2人共、ベートーヴェンの馴染みのある音楽家の作品で、よい選曲であった。

もちろん演奏会にベートーヴェンは出席しなかったし、彼のテーマによる即興曲が演奏される事もなかった事は、言うまでもない。



図19 1823年のリストの演奏会
ベートーヴェンの「聖別のキス」,1873

図19は、4月13日の演奏会の様子を描き「聖別のキス」と呼ばれる1873年のリトグラフである。これは、ベートーヴェンがリストをハグして、額にキスしている有名な場面である。

これにより、ベートーヴェンとリストが、この日に会ったかのような伝説が生まれた（以前、シンドラーにより、ベートーヴェンが演奏会に出席したという報告はあるが、これは後に撤回された）。

このリトグラフが描かれた1873年について若干述べる。

年号からも分かるように、この年は、リストのウィーンでの本格的デビューのjubilee（50年記念）の年に当たり、11月8日～11日までブダペストで、皇帝フランツ・ヨーゼフI世などを迎えて、盛大な記念式典が行われた。

「聖別のキス」のリトグラフは、式典を盛り上げるための、リスト関連の場面を描いた、リトグラフの一部であった。

これ以後、このリトグラフが独り歩きし、伝説が生まれたと思われる。

現代人の目から見れば、中年男と少年が挨拶がわりのハグや額にキスしたからといって、とるに足らない事であるが、これだけ有名（もちろん、クラシック音楽を楽しむ人以外は知らないだろうが）になったのは、2人が音楽史上の頂点に立つ大巨匠であったからに他ならない。この事は、ベートーヴェンとリスト以外の音楽家の組み合わせでは、だめであるし、このような出会いは、音楽史上、他に例をみない。

この事は、リストの、以後の人生を詳細に知れば、容易に理解できる。

ベートーヴェンとの出会いは、リストにとって特別の思い出であり、誇りであった。

生涯ベートーヴェンに敬愛の念を抱き続け、彼の曲を演奏・指揮し続け、彼の生地ボンに彼の立像を建立するのに尽力したのであ

る。リストのようにベートーヴェンの曲を世に知らしめた、ロマン派の音楽家は、他に一人もいない（図20）。



図20 ボンに於るベートーヴェン像の除幕式,1845

ジュビリーの73年には、リストは、ベートーヴェンのPソナタ12,13番を演奏し、「交響曲第9番」を指揮しているし、これまた尊敬するバッハのトリプル・コンチェルト等も演奏している。

図21は、ワイマールのリストの書斎の壁に掛けられた、ベートーヴェンの肖像画（1890）と右上は、その拡大図である。

やがてリストは、脂の乗りきった時代に、ベートーヴェンの交響曲全曲のP編曲に挑むことになる。



図21 ワイマールのリストの書斎
写真中央の壁のベートーヴェンの肖像画

<付録> 1800年前後のアマチュアの演奏能力, オーストリア大公ルドルフ

当時、楽しみのために、家庭で編曲を含む様々な音楽を演奏していたアマチュアの演奏レベルは、どれ位だったのだろうか。

1818年、チェルニーに突然、ベートーヴェンから大劇場（大レドゥーテンザール）での演奏依頼がきた。演奏日は明後日である。練習時間は、本日と明日のわずか2日間である。

演目は「変ホ長調のP協奏曲のアダージョとロンド」（つまり「P協奏曲第5番、皇帝、1808年」の第2,3楽章）である。

この事は裏を返せば、当時のコンサート・ピアニストが、このような要請に対応できた事を示している。

これに対し、チェルニーは「自分は現在、ピアノ教師で、演奏から遠ざかっている。耳の肥えたウィーンの聴衆の前で演奏するのはとても無理である。人前でこの曲を演奏するには、3ヶ月間の練習が必要である」という内容の返事をし、丁重に断っている。

ピアニストのレベルが高かった事が推察されるエピソードである。



図22 ルドルフ大公



図23 ルドルフ大公に献呈された「大公トリオ」
アシュケナーズ、パールマン、ハレル



図24 ルドルフ大公に献呈された「フィデリオ」
指揮カール・ベームとギネス・ジョーンズ

さて、この「P協奏曲第5番，皇帝」を献呈されたのは、本誌10月号でも述べた、「荘厳ミサ曲」他、「レオノーレ序曲」第2，3番，「フィデリオ序曲」，Pソナタ第26番（告别），29番（ハンマークラヴィア），32番，および「P三重奏曲，第7番，大公トリオ」を献呈された，ベートーヴェン後年の最大のパトロンである，ルドルフ大公であった（図22，23，24）。

ルドルフ大公は，周知のようにベートーヴェンの弟子であり，唯一の作曲の弟子でもあった。

そして非公開ながら，1811年にロブコヴィッツ侯爵邸での定演で，ルドルフ大公自身のピアノで，「皇帝」が初演されたのである（なおこの曲は，次にライプチヒで，更にウィーンでの初演は，1812年にチェルニーのピアノで初演されている）。

もちろん，大公はアマチュアであるが，「皇帝」のピアノを弾き通す実力はもっていたのである。

チェルニーが，上流階級の子弟にピアノを教えていた事からも分かるが，当時のウィーンには，数多くのピアノ教師が活躍していた。そして当時のアマチュア音楽家の演奏技術が，かなり高度であった事が推察される。

この事が，各分野の音楽の家庭用編曲版の需要が高かった理由であった。

図23は「大公トリオ」の名で呼ばれる「P三重奏曲，第7番」，1979-84年録音。

図24もルドルフ大公に献呈された「フィデリオ」。指揮はカール・ベーム，レオノーレ役はイギリスの誇るギネス・ジョーンズ，1969年録音。

<付録>モーツァルトとフンメルの場合

チェルニー，リストの場合とモーツァルトとフンメルの場合は，よく似ている。

フンメルは，ハンガリーの軍楽学校の校長の父からピアノを習い，父がウィーンの劇場指揮者に転じた時に，モーツァルトの弟子になり，モーツァルトの家で寝食を共にし，無料レッスンを受けたが，フンメルの場合も例外的であった。

2年間に亘るモーツァルトの指導後の，1787年，9歳の時にモーツァルトの配慮により，デビューした。

彼はベートーヴェンより8歳年少であったが，その後，ベートーヴェンと全く同じ，サリエリ，ハイドン，アルブレヒツベルガーの3人の師に学んだ（おとうとでし弟弟子）。

後年，彼は，ハイドンの後任としてエステ

ルハージ公、シュトゥットガルト、(そして後年、リストがその職に就いた)ワイマールの宮廷楽長に就任した。

彼は生前ベートーヴェンと並ぶ音楽家、ピアニストであった。

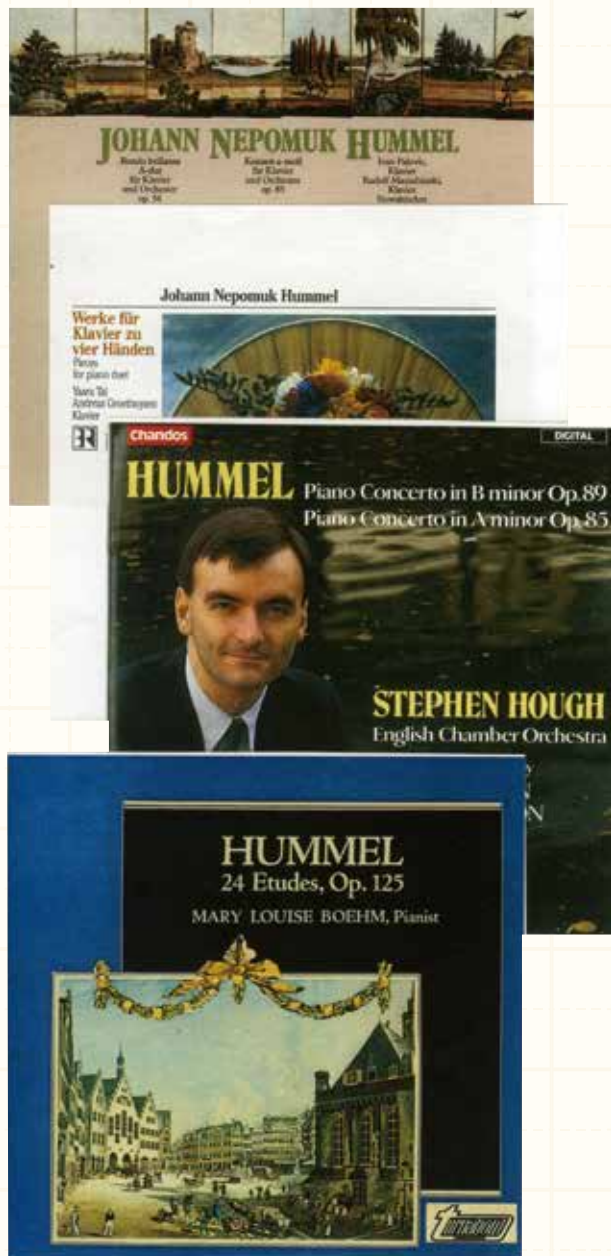


図25 上 :ピアノ協奏曲,1969
 中上:4手のためのピアノ曲,1987
 中下:ピアノ協奏曲,1986
 下 :「24の練習曲」,1973

シューベルト、メンデルスゾーン、チェルニー、ショパンらと交流を持ち、彼の最も有名な弟子は、リストとピアノの技量を競ったタールベルグである。

ショパンは、「モーツァルト、ベートーヴェ

ン、そしてフンメルが、我々全ての師である」と述べている。

フンメルは、1815年に「全調による24の前奏曲」を書き、これはショパンの「24の前奏曲、1839」に24年先駆けており、33年には、「24の練習曲」を出版している。

フンメルは、200以上の作品を残したが、生前に127作品が出版された(図25)。

<付録>作品の献呈について

作曲家はパトロン(後援者)、恩師、友人、恋人などに作品を献呈する事が多い。

私達は、献呈された人物を知る事により、作曲者の考え方や、社会的背景を推察する事ができる。更には、子弟関係も知られる。

ここでは、リストとチェルニーについて述べるが、チェルニーの人柄からか、自分の尊敬する音楽家に数多く献呈している。

演奏スタイルを尊敬するフンメルには、「大協奏曲」を献呈している。

リストには、24の長短全調、48のプレリュードとフーガによる「クラシック様式のピアニスト」、「二度目の旅、パリ滞在の思い出」の2曲を献呈した。

なお、内容は別として彼はバッハの「平均律クラヴィーア曲集」の校訂を行っている。

リストは師のチェルニーに、最も重要な「超絶技巧練習曲集」を献呈しているし、ベートーヴェンに対しては、その後、最大限の敬意を払った人生を送っている。これは個々の音楽家の性格の問題である。

献呈からチェルニーとリストは、互いの尊敬の上に師弟関係が成立していた事が、確認できる。

(つづく)